

「誠実の後で」

Ⅱ列王記 18:13-16

【1】序

南ユダ王国の中でも最も偉大な業績を残したのがヒゼキヤである。しかし、このヒゼキヤも神への信仰と一国の王として眼の前に見える問題の中で揺れ動いていた。民は、王に力を求め眼の前の状況にどのように判断を下すのか期待をしていた。このプレッシャーの中でヒゼキヤは真の祝福の原則を知る者であったが、弱さを持つ一人の人間でもあった。

【2】真の歴史の支配者

神は歴史の主であり、本来歴史は神の支配下にある。ヒゼキヤの時代も神の支配の中にあった。強国アッシリアも実は、神がこの国を興した。神はイスラエルを懲らしめるためにアッシリアを興したのである。神はご自身の教会と民を矯正するために、時として思いがけない手段を用いることがある。これは今日でも大いに起こりうることである。今日起こる出来事は、この光の中で理解されなければならない。

13 節からはアッシリアのユダに対する攻撃が記されている。このとき、アッシリア自体も周辺諸国からの反発の中に置かれ、パレスチナ攻略を急いでいたのである。ついに、エルサレムから 50 キロに迫るラキシュが包囲されてしまった。ヒゼキヤは、父アハズの政策と異なり、反アッシリア政策を取っていた。これは預言者イザヤが反対したことであった。イザヤはアッシリアにも周辺諸国にも頼らないように忠告していた。が、ヒゼキヤはこの忠告を無視し、戦いの準備を進めていたのである。このことが仇となった。

【3】ヒゼキヤの恐れと試み

ラキシュは国防の拠点であった。このラキシュが攻略されたことはユダの運命も風前のともしびを意味した。この危機に臨んでヒゼキヤの対応は当初とは違ってしまった。彼はアッシリアの王の要求に屈し、神殿、王宮の宝物倉、なんと神殿の扉や柱からも金銀を剥ぎ取ってアッシリアに服従の意志を示した。彼も主に頼ることにおいて完全な人ではなかった。すべては、人のわざではなく、主の主権的御業によることがわかる。ヒゼキヤもまた試みられなければならなかった。

【4】誠実の後で

ヒゼキヤは、これまで誠実に主に応答していたのに、その後大きな苦難、問題に襲われた。誠実であればこそ、まさにその時代の苦難に直面させられることがある。

聖書はしばしば、私たちの会う試練、試みは信仰者にとって必要なものであることを教えている（ヤコブ 1:2-4、1ペテロ 4:12）。主の祈りにおいても「試みにあわせないで」と祈る。それは私たちが試みられたとき、その誘惑に敗北することがないように守ってくださいという祈りである。私たちは自分の力では、神に向かって正しく生きることができないからである。この神への信頼の祈りを忘れる時、私たちは主の栄光ではなく、自分の立場を守ることに囚われてしまう。

ヒゼキヤの考えは甘かった。彼の弱さ、中途半端な信仰は返ってサタンの攻撃の誘い水のようになってしまった。しかし、主の憐れみは尽きない。これから先、ヒゼキヤの業績ではなく、主の御業が現されていくからである。